

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 現代日本語における気象現象の概念化
—概念メタファー理論によるアプローチ—

氏 名 松浦 光

論 文 内 容 の 要 旨

本稿は、Lakoff and Johnson (1980)の概念メタファー理論の枠組みで現代日本語における気象現象の概念化のプロセスを明らかにすることを目的とした論文である。Lakoff and Johnson (1980)の概念メタファー理論において、メタファー写像は一貫性を持つとされるが、実際には、メタファー写像にはギャップがあり、メタファー的意味の実現には制約が存在する。このような起点領域、目標領域の写像関係ではメタファー的意味の実現が可能であるはずの表現が実際には成立しない現象は「まだら」問題と呼ばれている。(鍋島(2011))

本稿は、「まだら」問題に対して、メタファーごとに認知機構が異なることが想定される「多重制約充足的メタファー観」(鍋島(2011))に立って、概念メタファーを考察した。つまり、従来の研究のように「まだら」問題を統一的に説明できる原理を追究するのではなく、一般的には説明しにくいような個々のメタファー表現に注目して扱った。これは個別的にメタファー表現をみていかなければその基盤と制約を導き出すことができないと考えるためである。

そして、事物とは言い難い「光」や「天候」などの現象に対して、「現象の構成要素」という概念を提案した。「現象の構成要素」とは、認知主体がおかれる外界の現象に対する概念化のプロセス(捉え方)において、身体経験に直接的に作用する要素である。この「現象の構成要素」を用いて、気象現象を中心とした個別的なメタファー表現の分析を試みた。我々は、こういった要素を捉えることで、メタファー表現を産出していることを主張した。

第1章では、本稿の研究の動機と目的を述べ、本稿の考察の対象と本稿が提案する「現象の構成要素」について提示した。

第2章では、認知言語学における概念メタファー理論に至るまでのメタファーの研究史を振り返った。次に、概念メタファー理論の争点を指摘した。それに基づき、前提とする言語観と援用する諸概念について述べて、本稿の立場を示した。

第3章では、「光」と視覚に関するメタファー表現として「明るい」と「暗い」を考察対象とし、

<<喜びは光>>、<<知識は光>>、<<希望は光>>において、光源（発光体・反射体）、光り方（瞬間的・持続的）、届き方（前/後・中心/周辺）、の3点の「光」の捉え方を提案した。「明るい」と「暗い」には、光源として発光体が存在し、「光」で照らされる空間と現象を知覚する視覚が存在する。これらの「光」の性質が、メタファー的意味の実現に影響を与えていることを指摘した。

第4章では、身体経験において触覚で知覚される「熱い」「あたたかい」「冷たい」の考察を行い、温度感覚の概念化のプロセスを明らかにした。温度感覚の概念化には、温度感覚を生起させる発生源、温度感覚を知覚すると捉えられる感覚主体、温度感覚について判断する観察者が関係することを示した。そして、現代日本語の「熱い」「あたたかい」「冷たい」において、<<興奮は熱>>、<<愛は火>>、<<優しさはあたたかさ>>が、影響を与えていることを指摘した。

第5章では、「晴れる」と「曇る」に関するメタファー表現の考察を通して、現代日本語における<<感情は天候>>、<<思考は天候>>、<<状況は天候>>という概念メタファーの存在を提示した。また、気象現象としての「雲」に遮蔽物・移動物、「霧」に遮蔽物としての性質を認め、「晴れる」「曇る」という現象の構成要素として「光」と遮蔽物と移動物を示した。この現象の構成要素が目標領域におけるメタファー的意味の実現に影響を与えていることを指摘した。現象の構成要素を想定することによって、各領域のメタファー表現の写像の偏りや性質の違いを明らかにした。

第6章では、「風」に関するメタファー表現の考察を行い、社会情勢や人間関係などの様々な状況の変化が「風」を通して捉えられていることを明らかにした。<<状況は天候>>における「風」は、メタファー表現としての現象の構成要素として「方向」・「力」を持つことを提示した。「方向」には、前/後・上/下、「力」には、強/弱が存在する。また、風は発生源から吹く、風は方向を変える、風は知覚者によって捉えられる、風は吹いた後に何らかの影響を及ぼす、という性質を持つ。これらの性質が時間的展開に基づき一連の構造を形成する。さらに、「風当たり」や「先輩風」をはじめとした人間を「風」の発生源と捉えるメタファー表現の基盤についても考察した。我々は、<<状況は天候>>の影響を受け、不特定多数の発生源の言動によって作り出される状況を「風」として捉えていることも指摘した。この概念メタファーは<<言動は風>>として生産性を持つことも述べた。また、「世間の風」や「隙間風」の考察を通して、<<優しさはあたたかさ>>、<<親密さは近さ>>など、「風」と複数の概念メタファーが関わっていることも明示した。

第7章では、「嵐」と「嵐」の一種である「台風」についてそれぞれが持つ固有の性質について考察した。「～の嵐」、「(人・組織) + 台風」、「台風の日」というメタファー表現の考察を行った。この考察を通して、<<状況は天候>>における「嵐」と「台風」は、メタファー的に共に状況の大きな変化を表すがその性質は異なる。「嵐」は状況の変化そのものを表すのに対し、「台風」は脅威となる大きな状況の変化の発生源を表す。そこには、「嵐」と「台風」が固有に持つ性質の違いが存在することを指摘した。この性質の違いがメタファー的意味にも影響を与えていることを述べた。

第8章では、本稿の結論をまとめ、今後の課題を述べた。

以上のように、気象現象を考察することで「光」、遮蔽物、移動物という現象の構成要素を導き出して、メタファー表現を捉え直した。そして、メタファー表現の分析を通して、気象現象の「光」、遮蔽物、移動物という現象の構成要素と各々の気象現象の固有の性質がメタファー的意味の実現に影響を与えていることを示した。

さらに、気象現象を現象の構成要素から分析し、「晴れる」とは「光」が遮蔽物に遮られていない状態であり、「曇る」とは「光」が遮蔽物に遮られている状態であることを指摘した。また、「雲」

「霧」が遮蔽物として捉えられ、「雲」「風」「嵐」「台風」が移動物として捉えられることも述べた。気象現象の概念化に関する身体経験として、「光」がもたらす「明るい」は「見える」、「暗い」は「見えない」という視覚に関する身体経験や「熱い」「あたたかい」「冷たい」という温度感覚に関する身体経験との相互関係も論じた。これらを明らかにすることによって、現代日本語における気象現象の概念化のプロセスを解明した。